

石垣島に集中した。彼らの中には定住指向が強く、将来の島の担い手として期待が寄せられている人びとがいる一方、筆者の石川は明示的に記述することを避けているようであるが、根無し草のようにこの島に流れ着く本土大都市出身者が、地元紙に取り上げられるほど顕在化していることも事実である。

編者の平岡が取り上げた蓋井島の事例は、本書の中で唯一ツーリズム以外の産業に関する論考である。離島はそれぞれ独自の地域的条件を有しており、農業や漁業で自立している島も少なくはない。しかし多くの離島は、第一次産業の担い手が流出し、既存産業が基盤から崩壊しているのが実情である。エミュー飼育という新分野に挑戦するこの島の成否はともかくも、限界的状況にある離島では、既存の常識を覆した取り組みが必要であることを、この事例は示している。

これらの報告から、離島にはたしかにあたらしい風が吹いているように思える。しかしそれはあまりにはかなげなそよ風で、離島の生活基盤を根底から覆そうとする暴風に抗するにはあまりにかすかである。それでもこの風に乗れば、あるいは離島が目指すべき新たな方向が見えるかも知れない。

「あたらしい風」は観光・ツーリズム方面から吹いている。しかし離島のツーリズムは既存のマストツーリズムと一線を画すべきであることが読み取れる。離島には、年間何百万人ものゲストを受け入れる余地はないし、人口1万人にも満たない離島では、たとえ1,000人の入り込み客でも大きな経済効果が期待できる。すなわち、離島では身の丈にあった規模の観光開発が必要である。そのためには巨大な観光市場ではなく、むしろ差別化され、粒のそろった消費者層を対象とすることが有効である。日本人は観光のゲストとしてはきわめて目が肥えている。このようなゲストに対して

は、レディメイドではなくカスタムメイドの観光メニューをそろえる必要があるが、五島列島のキリシタン観光や西表島のエコツーリズムは、特定の属性に特化したゲストが望むとおりのアトラクションを提供している。さらにブルーツーリズム・グリーンツーリズムは、ホスト側のホスピタリティや、金銭を超えたあたたかな関係を求めるゲストの要求にも応えうる。ツーリズムが離島の生き残りにある程度の役割を果たすことが期待される。

それでも評者は、ツーリズムが離島振興の特効薬であるというつもりはさらさらしない。離島の維持のためには、医療・介護・教育などのやせ細った生活基盤の立て直しと、農業・漁業・地場産業などの産業基盤の再構築、交通をはじめとするインフラの整備が必要である。例えば奄美群島の伝統産業である大島紬を、観光資源としてショウアップすることに金をつぎ込むよりも、地域経済を支える基幹産業として地道に再建する方が大切である。この風が何でも観光、何でもツーリズムの風であるとしたら、評者は乗れない。

(須山 聡)

橋本雄一編：『地理空間情報の基本と活用』古今書院、2009年7月刊、174p., 3,200円(税別)

「地理空間情報活用推進基本法(以下、NSDI法)」が2007年5月に成立し、同年8月に施行された。さらに「地理空間情報活用推進基本計画(以下、基本計画)」が、翌年の2008年に策定された。これらの法整備や計画策定は、誰もがいつでもどこでも位置や場所の情報を入手・活用できる「地理空間情報高度活用社会」の幕開けを示唆するものであろう。

本書は、このように地理空間情報をめぐる環境

が大きく変化しているなかで刊行された。地理空間情報を取り巻く全体像をわかりやすく論じた「専門書」、NSDI 法や地理情報標準の学習に用いる「教科書」、そして地理空間情報に関する理解を深めるための「参考書」、それぞれのニーズに応える書籍である（「はじめに」より）。全4部17章から構成されており、それぞれ知識・経験に富む研究者・実務家が執筆を担当している。以下、各部の概要を紹介していきたい。

第Ⅰ部「概念編」は、「地理空間情報活用推進基本法の成立（第1章）」、「地理空間情報活用推進基本法と基本計画（第2章）」、「GIS の概念と歴史（第3章）」、「衛星測位の概念と歴史（第4章）」で構成されている。NSDI 法・基本計画の概要や成立に至るまでの経緯などが解説されており、最近の法整備の状況について確認できよう。GIS や衛星観測といったシステムの歴史や現状、将来への展望も提示されており、地理空間情報に関連する基礎的な概念を学ぶことができる内容となっている。さらに今後、地理空間情報をいかに整備・流通・利活用していけばよいか、という課題も提示されている。

第Ⅱ部「実務編」には、「地理空間情報の標準化（第5章）」、「地理空間データのメタデータと製品仕様書（第6章）」、「地理データ入力と検査法（第7章）」、「地理空間データモデルと空間分析（第8章）」が収録されている。まず、地理空間情報標準の現況や必要性が述べられ、その具体的な作成方法が図などを交えつつ説明されている。さらに、空間データモデルの概念や、基本的な空間分析手法の解説も行われている。したがって、地理空間情報の作成から分析に至るまでの知識を系統的に修得することが可能となろう。

第Ⅲ部「企業活用編」では、「測量・地図企業における GIS 利用（第9章）」、「自治体における防災 GIS の構築（第10章）」、「自治体における統合

型 GIS 構築（第11章）」が提示されている。ここでは、NSDI 法制定に伴い測量・地図業界のサービス内容が多方面へと展開しつつあることや、自治体が災害への公助やインフラ管理を目的とした GIS を構築し、関連サービスの提供を行っていることが紹介されている。地理空間情報高度活用社会の形成に向けた、自治体・民間企業の動向が把握できるようになっている。

第Ⅳ部「研究活用編」では、「沖合海域における持続可能な漁業活動支援のためのユビキタスな情報サービスに関する研究開発（第12章）」、「北海道における GIS を活用した自然環境情報の共有化と情報公開（第13章）」、「環境行政における GIS の利活用（第14章）」、「LiDAR による3次元 GIS データの自動生成技術（第15章）」、「生物生産のロボット化と情報化（第16章）」、「GIS と衛星測位を用いた積雪寒冷地の道路交通管理システム開発（第17章）」が紹介されている。これら6つの事例からは、様々な分野において地理空間情報が活用されている現状を知ることができよう。

また、付属資料として「メタデータエディタ」および「製品仕様書エディタ」の利用方法が掲載されている。第Ⅱ部と合わせて精読することにより、地理空間情報標準に即したデータの作成が可能となっている。

一昔前までは、地理空間情報の利用は研究者や技術者に限られていたように思う。しかし現在は、意識せずとも皆が地理空間情報を利用している時代である。例えばインターネットを通じた住所検索や経路検索などは、もはや日常的に見られる光景となった。こうした時代において、研究者、技術者に限らず、地理空間情報に関心のある人全てに、本書を薦めたい。地理空間情報に関する「専門書」、「教科書」、「参考書」を兼ね備えており、自身の知識・技術に応じて読み進め、知見を広げることが可能である。そして、それぞれの分野・

地域における活用方法や発信の仕方を議論していくことで、「地理空間情報の輪」が様々な地域やスケールで展開していくことを願う。

(駒木伸比古)

神田孝治編：『観光の空間－視点とアプローチ』
ナカニシヤ出版，2009年10月発行，284p，2,900円（税別）

神田孝治編：『レジャーの空間－諸相とアプローチ』ナカニシヤ出版，2009年10月刊行，270p，2,900円（税別）

姉妹本である両書には，地理学および社会学を中心として多様な学問分野の研究者が著者として参加している。この著者の多彩さから，編者のもつ幅広い「研究者ネットワーク」をうかがえる。『観光の空間－視点とアプローチ』は，これまでの観光関連の書籍において看過されていた「空間」の問題に焦点を当て，多様なアプローチを展開している。『レジャーの空間－諸相とアプローチ』も同様に，アプローチとしての「空間」をレジャーの諸相に対応させ，多彩な議論が展開されている。両書ともに，各章冒頭にわかりやすく表現された導入が，各章末尾に3段階の課題が設けられており，学生用テキストとしての使用が意識されている。以下，両書の内容を概観する。

まず、『観光の空間－視点とアプローチ』では，序章において，編者が「空間」という視点の整理，および各章の位置付け・解説を行っている。そして，観光について「空間」という視点から3部が編成され，各部に4つずつサブテーマが設けられ，さらにそれぞれのサブテーマに対して2つの章が配置されている。

Part 1「観光空間の形成と変容」については，まず「観光地の形成と交通機関の発達」をサブテ

マとして，交通機関の発達に加えて観光情報が観光地形成に重要な役割を果たしたことが示されている。1章（関戸明子）では草津温泉の変容と鉄道交通の整備との関係性，また2章（齋藤枝里子）では大阪商船の寄港地周辺の観光地化および瀬戸内遊覧の成立が論じられている。次の「観光地の創造」では，観光地の社会的な創造について論じている。3章（飯塚隆藤・加藤めぐみ）では，神戸市須磨寺遊園地が花見の場と化し，名所として成立する社会的な背景が探求され，4章（松井圭介）では長崎のキリシタン観光における行政とカトリック協会という二つの行為体の役割を考察している。また，「観光資源化と社会の変容」では，観光資源と社会的背景の関係性について論じている。5章（森 正人）では，イギリスのダラムの炭鉱産業が観光を通じて遺産として再評価され，そこから「地域」がイメージされた過程について，6章（妙木 忍）においては，客層の変化から秘宝館という性をテーマにした遊興空間の変容について考察している。最後に，「国際観光と地域」では，観光地化の地域インパクトについて検討されている。7章（横山 智）は，ラオスのヴァンヴィエンのバックパッカー地区形成による地域への社会経済的影響について論じ，8章（森本 泉）では，楽園イメージが投影されるネパールのカトマンドゥにおいて形成された観光業集中地区とそこでの住民向け消費文化の創出について述べられている。

Part 2「観光客の空間行動と情報・経験・イメージ」においては，はじめに「観光客の空間行動」が論じられている。9章（呉羽正昭・金 玉実）では日本における外国人観光客の特徴が，10章（佐藤大祐）では高度経済成長期の長崎県雲仙の外国人宿泊客の客層の変化が述べられている。次に観光行動との関係から「観光空間の情報」が検討されている。11章（金子直樹）では日本人の観光に影響を及ぼしたガイドブックの変遷について，12